

クナシリ・メナシの戦いについて(4)

はじめに

今回は、新井田孫三郎が記した「寛政蝦夷乱取調日記」から、アイヌ側の証言を見て行きます。寛政元年（1789）閏6月15日に「しらぬか（白糖）」運上屋で庄蔵に対する取り調べを行った翌日に、「あつけし（厚岸）」の「シモチ」や「イニンカリ」ら長人達10名と、「のつかまふ（根室市街近郊）」長人の子供「カネマキ」らを同所に呼び出し、クナシリ地方で騒動の起こった「趣意」を尋ねています。

ような考えからか、同所の「蝦夷共」へ話したのは、当春よりクナシリ運上屋へ参る者共は、米・酒その他味噌の類に到るまで毒を入れて置く、それはこの島の「蝦夷共」を残らず「毒害」（毒殺）するゆえ、と言われました。

度重なる不審死

すると当夏5月中、同所長人「サンキチ」が病気の時、「酒を薬にいたせ」と言われて、運上屋よりサンキチ宅へ使いの者が酒を持参し、サンキチへ申し聞かせたのは、「右酒は目附（監察役）勘平方」より遣わされた酒とし、すぐに吞ませられ、この酒は「暇乞（告別の酒）」であると言われ帰られたところ、間もなく後にサンキチは病死致しました。

南部大畑村の左兵衛は、最初「久奈志利」で総支配人を勤めていましたが、昨年より同所の「まめぎらえ」という所で海鼠引（なまこ漁）や鱒（マス）を原料としたメ粕（つくり）稼ぎ方の支配人となりました。どの

なおまた、そのころ同所「ふるかまふ」長人マメキリの女房が、運上屋で飯を

食べましたら、そのまますぐに死ぬということがございました。

「遺恨、堪忍成り難し」

これにより、サンキチの子供ホニシアイ又兄弟を始め、「数多の夷ども」が申すには、この度の毒殺に限らず、「毎度銘々（ひとりひとり）」遺恨（忘れがたい深い恨み）に思うことが多くございますので、「仲々堪忍成り難し」と申しております。この度皆々を殺害するに至ったものでございます。この毎度の「遺恨」に思う事と申すのは、

- 一、前々より御土産を下さつていた蝦夷共（土産取り：長老）へも、昨年中より一向御土産等も下されず、ウタシ、メノコに至るまで、日々運上屋で僅かの手当で「召使」われているので、銘々の稼ぎ方が「甚不自由」になり、ますます日々の生活が「難渋（貧困）」になってまいりました。
- 一、近年クナシリへやって

来た「シヤモ共」は何れも「同心」にて、ウタシは言うに及ばず、長人共の女夷に至るまで密夫しており、銘々から少しでも彼らに申し出が有ったならば、理不尽にも打ち叩くと申していました。

殊に左兵衛と申す者は、「ウテクンテ蝦夷方」より「オノヤマ」と申す「女夷」を買い取り、同人の居所へ引き連れ、夫婦世帯持ちと同様に致していた事、何れも夷とも口惜しき事でございましたため。

- 一、「くな尻騒動」で殺害されたものの居所人数左の通りでございます。
- 一、ツキノ工所にて7人
- 一、マメキラへにて6人
- 一、運上屋にて5人
- 但し内一人は目附
- 一、フルカマフにて6人
- 内2人助命あり
- 都合24人、内2人は助命有

「しらぬか」運上屋での鎮圧隊は、取り調べの上で「のつかまふ」長人シヨソコでなければ分らないことがあるため、閏6月15日に飛脚として夷人2名を申付けましたが、到着が遅くなりそつなので、17日に通詞（通訳）菊治郎に小者を付け、先に申付けた夷人2名と共に夷舟でシヨソコを呼びに遣わせました。

26日、人足夷が不足していましたが、波も和んでいたので朝六つ半（午前6時ごろ）に出船し、昼八つ時（午後2時頃）「くすり（釧路）」へ着船しました。翌27日には、総勢が夷船にて朝六つ過ぎ（午前5時過ぎ）に出船し、昼七つ頃（午後4時頃）「あつけし」へ着船しました。すると、前日の七つ頃（午後4時頃）には、「のつかまふ」の長人シヨソコら6名が、「あつけし」に船六艘ですでに到着していました。

鎮圧隊「しらぬか」から「あつけし」へ